

# 古萩鐔の考察 — 「枝菊透」鐔 — 伊藤 三平

はじめに

安土桃山時代になるまでは鐔や刀装具に作者銘は刻されることはほとんど無く、当時の金工に関する古文書も存在しない。ただ古い時代の作品と推定される優れた作品群があり、後世の数寄者が作品の特徴によって分類名を付けている。その一つに「古萩鐔」がある。今回は、この名称・作者に関して考察したい。

(注) ちなみに「古萩」と言う言葉は、茶人の

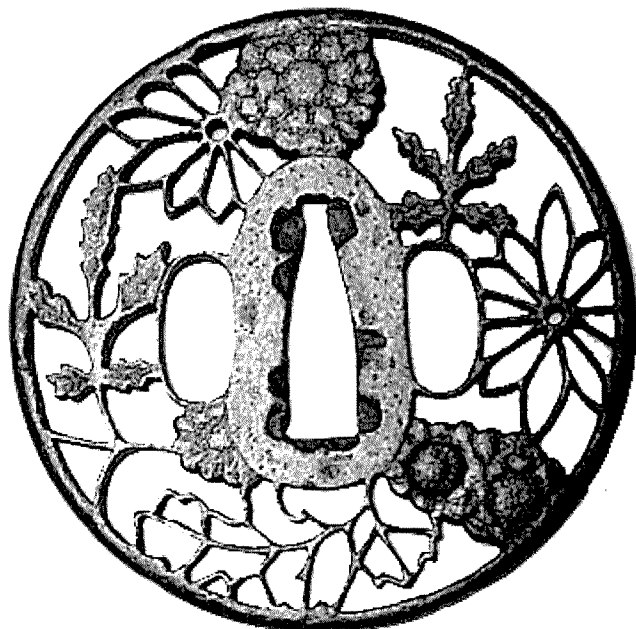
間で「一楽二萩三唐津」と愛好されている茶陶である萩焼の前期（江戸時代初期から享保頃）の作品呼称を転用している。ただし、「古」の冠称は「古備前」もそうだが刀剣・刀装具界の方が製作時代は概して古い。

## 1. 古萩鐔とは

古萩鐔は写真のように菊花とその枝葉を肉彫透（立体的な形を彫って透文様にしたもの）にしたデザインに限られると言って過言ではない。菊花と枝葉を陽刻（面を残して形を彫る）と陰刻（外形だけを線で枠取るように彫る）を使い分けて全面に彫られている。陰刻や枝葉の陽刻の巧みさに比して菊花の陽刻には敢えて崩している箇所もあるが、模様全体の陰陽のバランスが何とも言えない味を出している。

伊藤 三平

掲示の鐔は代表作である。法量は縦82・5mm、横82・5mmの正丸形であり、耳厚4・2mmで切羽台の厚さもほぼ同様である。櫃孔が左右同型で切羽台も大きめで下脹れ型であるが、これらの特徴は古い時代のもたとされている。



## 2. 古萩鐔と言う名称が生まれた経緯

『日本刀大百科事典』（福永酔剣著）では、「古萩鐔」を次のように解説している。

「古い萩鐔。室町末期から織豊時代に作られた平安城鐔風の透しのある鉄鐔。明治30年ごろ、土佐藩士・森四郎の鐔押形集に、菊の地透し鐔に「古萩」と注記のあるのが紹介されて以来、古萩鐔という一項が、鐔工書に見られるようになった。しかし、いずれも無銘であるから、萩で作ったという証拠はない。萩が発展したのは慶長9年（1604）、毛利輝元がここに築城した以後のことである。ここで鐔が製作されたとは、とうてい考えられない。長州で作られたことが確かならば、山口城下のはずである。

中井派の祖・光恒は明徳（1390）ごろ、山口城下にいたという。明徳は明応（1492）の誤記と見るべきである。河治派の祖・道裕も大内氏時代、山口で製鐔していたという。山口ならば大内氏の城下で、鐔工としての営業が可能だったし、また京との交流も激しかった。平安城鐔の作風が伝播した可能性は十分にある。中井派や河治派の先祖たちが製作したのを古萩鐔、と見るべきである。」

江戸時代に長門国は肉彫透鐔の製造が盛んで、この記述にある中井、河治をはじめ岡本、岡田、金子、中原、藤井、井上、八道などの各家が長州鐔の金工として代々栄えている。

長州鐔には次のような枝菊透鐔（図は「長州萩之住 八道市平」（鐔小道具鑑定入門）より）が存在する。このように江戸時代の長州鐔工が製作した「枝菊透」鐔と似ていて、時代が上がる鐔というところで古萩鐔の名称が今でも使われているのである。



### 3. 鐔愛好家の土佐藩士…森四郎

上記の記述にある土佐藩士森四郎の鐔押形集は探せていないが、鐔蒐集日記とも言うべき史料が現存しており、高知県立歴史民俗資料館で2012年に開催された「特別展 刀 もののふ武士の魂 ―備前の名刀と土佐ゆかりの刀剣―」展のカタログに「コラム 土佐藩士森四郎の鐔収集」というページで紹介されている（原典は高知県立歴史民俗資料館の杜山文庫にある「森正名江戸日記」）。この日記の天保元年2月11日条に、同好の士・奥村氏と一緒に本郷で鐔を買った記録があり、「奥村は肥後の古萩の鐔」との記載がある。『肥後の古萩』はおかしな言葉であるが、肥後鐔

には「枝菊透し」のデザインの鐔があり、それが「肥後の古萩」と称されたのであろうか。

ちなみに土佐藩出身者は幕末・戦前にかけて刀剣や刀装具の蒐集・研究に関して大きな役割を果たしており、信家鐔の逸話で知られる中西竹五郎、鐔全般では秋山久作、川口陟のぼる、肥後鐔の長屋しげな重名、刀剣では今村長賀ながよし、別役成義べつやくなりよし、谷干城、山岡重厚などが知られている。森四郎も鐔愛好家として土佐藩では知られており、秋山久作の鐔押形集にも、刀剣鑑定家の今村長賀の鐔押形の書き込みにあるとして氏名を留めている。

### 4. 古萩鐔に関する識者の見解

近年の鐔の研究者が「古萩鐔」に関して言及している代表的な説を紹介するが、京透鐔か、京正阿弥鐔の一分派という説が主流である。

#### (1) 『鐔観照紀』

（鳥越一太郎著 1965年刊）

「京透鐔」の説明の項において次のように述べられている。

「これ（注：古萩鐔）は京透の一種（平安城派）と信ずる。ただし京透の一種だろうとは、先に秋山白貴翁はくひ（注：久作）の説がある。翁の説明によると、「土佐藩士森四郎翁の押形から古萩と

記した実物が発見されたが、今村長賀氏等は古萩の名でこれを宣伝されたのである。実はその名称は森翁の鑑定違いから生じたもので、萩とは関係

のないものだ」とのことである。」

鳥越氏は続けて、同様の鐔に岡本友次銘（注：長州鐔）のものがあり、長州鐔工の岡本家は京正阿弥系と見られていることにも言及している。

（注は伊藤）

#### (2) 『刀装小道具講座 1 鐔工編』

（若山泡沫著 1972年刊）

「素直にその作風や時代性を考究して、桃山時代初期の京透鐔工群の優れた一分派であると断定したほうがより妥当であると思う。（中略）古萩は肉取に手強さと優美さがあり、これに雅味が加わって、京透鐔のなかでも格調のある作品となって愛好者を魅了している。ただし、図柄がほとんど菊花に一定しており、この点については再考を要するであろう。」

#### (3) 『刀装・刀装具初学教室24』

（福士繁雄著「刀剣美術」473号 1996年刊）

「作風から判断しますと、耳と切羽台は平安城透かしとか京透しに似ています。ですが、ほとんどの鐔が肉彫透しになっていますから、京透し系統よりは、むしろ京都の正阿弥系と鑑た方がいいと思います。それに時々、金の布目象眼が施されたものがありますから、ほぼ決定的だといってよいでしょう。」

## 5. 菊花の彫に関する史料

前述した若山氏の著述の中に「図柄が菊花に一定していることに再考を要する」とあるが、私はこの作者が菊花の彫に拘っていることに注目したい。

『日本刀大百科事典』（福永酔剣著）の「むねよし【宗吉】」の項に「金工。江戸の菊川派の祖。通称は長兵衛。菊花の透し彫りを得意としたので、世人は、菊彫り長兵衛」と呼んだ。自らもそれを自覚して、屋号を「菊」と名乗った。江戸中期の人で、馬喰町四丁目、浅草橋内の広場のところにいた。菊花の透し彫りの名人として、江戸初期、九州に房吉という名工がいた。」とある。そして次の図版を「菊長兵衛の鐔」（この図からは銘は確認できない）として掲載しているが「古萩」とされる鐔より精緻な彫りである。



菊長兵衛の鐔

ちなみに菊川派では寛政期頃の菊川久英（南甫）が大名であり、諸書に取り上げられているが画題は菊に限らず幅広い。

なお、この項の後半部分の「江戸初期に九州にいた菊花の透し彫りの名人の房吉」が気にかかる。房吉については『金工事典』（若山泡沫著）の「房吉」の項に「九州の上手の鐔工で「菊の透しに妙なり」と一本に記すが、あるいは肥後の林藤八同人の房吉であろうか」と記されている。

若山氏が根拠とされた原典は不明だが、福永氏は事典の記述における原典として『刀盤賞鑿口訣』（松宮観山著 元禄13（1700）年）と『装剣奇賞』（稲葉通竜著 天明元（1781）年）を挙げられている。

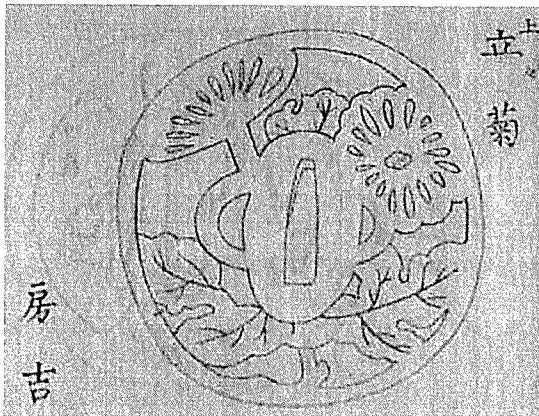
『装剣奇賞』には「宗吉」は伏見から金澤に移った象嵌師、「房吉」は越前の明珍派の甲冑関係工が記されているだけである。「長兵衛」の項に「姓氏未詳 江戸馬喰町4丁目 菊をしづめ彫にする事上手なるをもて、世に長兵衛菊と称美す、其たくみ今つたえ伝て三代也」とある。なお文中にある「しづめ彫」は、現代では「沈み彫り」と称されている技法のことと考えられる。これは彫刻を施す場合に表面に浮き出た模様を作り出す「浮き彫り」に対して、「沈み彫り」は素材の表面を凹ませて陰影で模様を作り出す技法と言ふ。

『装剣奇賞』が刊行された天明元（1781）年時点で三代目と言う意味であれば初代長兵衛は江戸時代中期の元禄末（1704）年頃であろう。

か。『日本刀大百科事典』に記されている「江戸初期の菊花の透し彫りの名人房吉」とは時代が合わないことになるが、気になる記述である。古い時代の優れた菊花の刀装具は「菊造腰刀拵」（国立博物館と毛利博物館にそれぞれ収蔵）の金具や「古美濃」に分類されている作品群にあるが、これらの製作時代は古く、また画題も菊花だけに限定しているわけではない。

『刀盤賞鑿口訣』の一節に「古鐔年数の程も見え分ぬをぬげと称す、上古の作者其の名伝はらず（中略）其内信家房吉など銘有之もの稀に見えたり」（『日本刀盤図説』竹沢正夫著から孫引き）がある。昔は茶道具もそうだが古い時代の作品を「根抜け」と総称していたが、数少ない在銘品として信家と並んで房吉が記されている。ただし本文中には「越前房吉 三代有り甲冑師也」が記されているだけである。

また同書には  
は鐔の図や  
銘、簡単なコ  
メントの図が  
多く付けられ  
ており、その  
中に「房吉」  
作と注記され  
ている図や在  
銘の図があ  
り、そのなか  
ら「立菊」の  
図を引用して



おくが、他の房吉作とされているものには「劍菱（各種家紋透）」「鶯宿梅（梅樹透）」「投桐」などがあり、肥後鐺のようなものである。

他の刀装具関係の古書では『鑿工譜略』（栗原信充著 天保15年）の「重治」項に「后房吉ト改 林又七」が見られる。

鐺関係の古書では肥後春日派の林又七、藤八を房吉と認識していたと考えられるが、現在の鐺書では三代藤八に「房吉作」在銘の「梅樹透」鐺が1枚だけ確認されている（『林・神吉』伊藤満著、図版100参照）。

森四郎が生きた江戸時代後期における鐺書のレベルでは「奥村は肥後の古萩の鐺」の記述もありえると考えられる。しかし肥後鐺であれば「菊花の透し彫り」だけを名人として褒めることはないと思う。

## おわりに

今後の研究課題を列挙しておく。

- ① 「古萩」という分類名称は疑問だが、古鐺の「尾張」「古美濃」「鎌倉」等のように地名を冠する分類名称のそれぞれについても課題があり、「古萩」だけの問題にとどまらない。
- ② 「古萩」はデザインが良いだけに昔から後世の写し物も多かったと思われる、彫口に精粗がある。その写し物が交じった状態で流派の出自を判断するのも間違うと思う。
- ③ 「九州の菊花の透かし彫の名人」「天明期まで三代続いている菊彫り長兵衛」などの伝承は、それなりに根拠はあったと考えると大事にしたい。